

衆生身心御書

弘安元年春 五七歳

衆生の身心を^説とかせ給ふ。其の衆生の心にのむとて^説とかせ給へば、人の説なれども衆生の心をいはず。かるがゆへに随他意の経となづけたり。譬へば^酒さ^好けもこの^親まぬをやの、きわめて^最さ^愛けをこのむいとをしき子あり。かつはいとをしみ、かつは心をとらんがために、かれに^勤さ^勤けをすゝめんがために、父母も酒をこのむよしをするなり。しかるをはかなき子は父母も酒をこのみ給ふとをもへり。提謂^{たいい}経と申す経は人天の事をとけり。阿含経と申す経は二乗の事をとかせ給ふ。華嚴経と申す経は菩薩のことなり。方等・般若経等は或は阿含経・提謂^似経ににたり、或は華嚴^似経にもにたり。此等の経々は末代の凡夫これをよみ候へば、仏の御心に叶ふらんとは行者はをもへども、くはしくこれをろむずれば己^{おの}が心をよむなり。己が心は本よりつたなき心なれば、はかばかしき事なし。法華経と申すは随自意と申して仏の御心をとかせ給ふ。仏の御心はよき心なるゆへに、たといしらざる人も此の経をよみたてまつれば利益^計はかりなし。麻の中^蓬のよもぎ・つゝの中^筒のくちなは・よき人^睡にむつづもの、なにとなけれども心もふるまひも言もなをしくなるなり。法華経もかくのごとし。なにとなけれどもこの経を信じぬる人をば仏のよき物とをばすなり。此の法華経に^於をひて、又機により、時により、国により、ひろむる人により、^様やうやうにかわりて候をば、等覺の菩薩までもこのあわひをばしらせ給わずとみへて候。まして末代の凡夫はいかでかはからひを^仰せ候べき。しかれども人のつかひに三人あり。一人はきわめてこざかしき。一人は^果はかなくもなし、又こざかしからず。一人はきわめてはかなくたしかなる。此の三人に第一は^過あやまちなし。第二は第一ほどこそなけれども、すこしこざかしきゆへに、主の御ことばに私の言を^添そうるゆへに、第一の^悪わるきつかいとなる。第三はきわめてはかなくあるゆへに、私の^{ことば}言を^交まじへず。きわめて正直なるゆへに主の言をたがへず。第二よりもよき事にて候。あやまって第一にもすぐれて候なり。第一をば月支の四依に^譬たとう。第二をば漢土の人師にたとう。第三をば末代の凡夫の中に^{くち}愚癡にして正直なる物にたとう。仏在世はしばらく此を^置をく。仏の御入滅の次の日より一千年をば正法と申す。この正法一千年を二つにわかす。前の五百年が間は小乗経ひろまらせ給ふ。ひろめし人々は迦葉・阿難等なり。後の五百年は馬鳴・竜樹・無著・天親等、権大乘経を弘通せさせ給ふ。法華経を^片ばか^端たはし計りかける論師もあり、又つやつや^出申し^出ださぬ人もあり。正法一千年より後の論師の中には、少分は仏説^似ににたれども、多分を^誤あやまりあり。あやまりなくして而も^足たらざるは迦葉・阿難・馬鳴・

竜樹・無著・天親等なり。像法に入りて一千年、漢土に仏法わたりしかば、始めは儒家と相論せしゆへに、いとまなきかのゆへに、仏教の内の大小権実の沙汰なし。やうやく漸く仏法流布せし上、月支よりかさねがさね仏法わたり来るほどに、前の人々はかしこきやうなれども後にわたる経論をもつてみればはかなき事も出来ず。又はかなくをもひし人々もかしこくみゆる事もありき。結句は十流になりて千万の義ありしかば、愚者はいづれにつくべしともみへず、智者とをぼしき人は偏執かぎりなし。而れども最極は一同の義あり。所謂一代第一は華嚴經・第二は涅槃經・第三は法華經なり。此の義は上一人より下万民にいたるまで異義なし。大聖とあうぎし法雲法師・智蔵法師等の十師の義一同なりしゆへなり。

而るを像法の中の陳・隋の代に智顛と申す小僧あり。後には智者大師とがうす。法門多しといへども、詮ずるところ法華・涅槃・華嚴經の勝劣の一つ計りなり。智顛法師の云はく、仏法さかさまなり云云。陳主此の事をたださんがために、南北の十師の最頂たる慧暉僧上・慧曠僧都・慧栄・法歳法師等の百有余人を召し合はせられし時、法華經の中には「諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云。又云はく「已今当の説は最も為れ難信難解なり」等云云。已とは無量義經に云はく「摩訶般若・華嚴海空」等云云。当とは涅槃經に云はく「般若波羅蜜より大涅槃を出だす」等云云。此の經文は華嚴經・涅槃經には法華經勝ると見る事赫々たり明々たり、御会通あるべしとせめしかば、或は口をとぢ、或は悪口をはき、或は色をへんじなんどせしかども、陳主立ちて三拜し、百官掌をあわせしかば、力及ばずまげにき。一代の中には第一法華經にてありしほどに、像法の後の五百に新訳の経論重ねてわたる。太宗皇帝の貞觀三年に玄奘と申す人あり。月支に入りて十七年、五天の仏法を習ひきわめて、貞觀十九年に漢土へわたりしが、深密經・瑜伽論・唯識論・法相宗をわたす。玄奘の云はく「月支に宗々多しといへども、此の宗第一なり」と。太宗皇帝は又漢土第一の賢王なり。玄奘を師とす。此の宗の所詮に云はく「或は三乘方便・一乘眞実、或は一乘方便・三乘眞実」と。又云はく「五性は各別なり、決定性と無性の有性は永く仏に成らず」等云云。此の義は天台宗と水火なり。而も天台大師と章安大師は御入滅なりぬ。其の已下の人々は人非人なり。すでに天台宗破れてみへしなり。其の後則天皇后の御世に華嚴宗立つ。前に天台大師にせめられし六十卷の華嚴經をばさしをきて、後に日照三蔵のわたせる新訳の華嚴經八十卷をもつて立てたり。此の宗のせんにいわく、華嚴經は根本法輪、法華經は枝末法輪等云云。則天皇后は尼にてをさせしが内外典にござかしき人なり。慢心たかくして天台宗をさげをぼしてありしなり。法相といふ、華嚴宗といふ、二重に法華經かくれさせ給ふ。其の後玄宗皇帝の御

宇に月支より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経そしっじと申す三経をわたす。此の三人は人がらといひ、法門といひ、前々の漢土の人師には対すべくもなき人々なり。而も前になかりし印と真言とをわたす。ゆへに仏法は已前には此の国になかりけりとをばせしなり。此の人々の云はく、天台宗は華嚴・法相・三論には勝れたり。しかれども此の真言経には及ばずと云云。其の後妙楽大師は天台大師のせめ給はざる法相宗・華嚴宗・真言宗をせめ給ひて候へども、天台大師のごとく公場にてせめ給はざれば、たゞ闇夜このにしきのごとし。法華経になき印と真言と現前なるゆへに、皆人一同に真言まさりにて有りしなり。

像法の中に日本国に仏法わたり、所謂欽明天皇六年なり。欽明より桓武にいたるまで二百余年が間は三論・成実・法相・俱舍・華嚴・律の六宗弘通せり。真言宗は人王四十四代元正天皇の御宇にわたる。天台宗は人王第四十五代聖武天皇の御宇にわたる。しかれどもひろまる事なし。桓武の御代に最澄法師、後には伝教大師とがうす。入唐已前に六宗を習ひきわむる上、十五年が間天台・真言の二宗を山にこもりみて御覧ありき。入唐已前に天台宗をもって六宗をせめしかば七大寺皆せめられて最澄の弟子となりぬ。六宗の義破やぶれぬ。後延暦廿三年に御入唐、同じき廿四年御帰朝、天台・真言の宗を日本国にひろめたり。但し勝劣の事は内心に此を存じて人に向かつてとかざるか。同じき代に空海という人あり、後には弘法大師とがうす。延暦廿三年に御入唐、大同三年御帰朝、但真言の一宗を習ひわたす。此の人の義に云はく、法華経は尚華嚴経に及ばず。何に況んや真言於にをひてをや。伝教大師の御弟子に円仁えんにんという人あり。後に慈覚大師とがうす。去ぬる承和五年の御入唐、同じき十四年に御帰朝、十年が間真言・天台の二宗を学がくす。日本国にて伝教大師・義真・円澄に天台・真言の二宗を習ひきわめたる上、漢土にわたりて十年が間八箇の大徳にあひて真言を習ひ、宗叡・志遠等に値ひ給ひて天台宗を習ふ。日本に帰朝して云はく、天台宗と真言宗とは同じく醍醐なり。俱ともに深秘なり等云云。宣旨を申してこれ添にそう。其の後円珍と申す人あり。後には智証大師とがうす。入唐已前には義真和尚の御弟子なり。日本国にして義真・円澄・円仁等の人々に天台・真言の二宗を習ひきわめたり。其の上去ぬる仁寿三年に御入唐、貞観元年に御帰朝、七年が間天台・真言の二宗を法全はっせん・良諤りょうしょ等の人々に習ひきわむ。天台・真言の二宗の勝劣鏡かがみをかけたり。後代に一定争あらそひありなん、定むべしと云ひて、天台・真言の二宗は譬へば人の両の目・鳥の二の翼のごとし。此の外異義を存ぜん人々をば祖師伝教大師背にそむく人なり、山に住むべからずと宣旨を申しそへて弘通せさせ給ひき。されば漢土日本に智者多しというとも此の義をやぶる人はあるべからず。此の義まことならば習ふ人々は必ず

仏にならせ給ひぬらん。あがめさせ給ふ国王等は必ず世安穩にありぬらんとをばゆ。

但し予が愚案は人に申せども、御もちあるべからざる上、身のあだとなるべし。又きかせ給ふ弟子檀那も安穩なるべからずとをもひし上、其の義又たがわず。但此の事は一定仏意には叶わでもやあるらんとをばへ候。法華經一部八卷二十八品には此の經に勝れたる經をはせば、此の法華經は十方の仏あつまりて大妄語をあつめさせ給へるなるべし。随つて華嚴・涅槃・般若・大日經・深密等の經々を見るに「於諸經中最在其上」の明文をやぶりたる文なし。随つて善無畏等・玄奘等、弘法・慈覺・智証等種々のたくみあれども、法華經を大日經に対してやぶりたる經文はいだし給わず。但印と真言計りの有無をゆへとせるなるべし。数百卷のふみをつくり、漢土日本に往復して無尽のたばかりをなし、宣旨を申しそへて人ををどされんよりは、經文分明ならばたれか疑ひをなすべき。つゆつもりて河となる、河つもりて大海となる、塵つもりて山となる、山かさなりて須弥山となれり。小事つもりて大事となる。何に況んや此の事は最大事なり。疏をつくれけるにも両方の道理文証をつくさるべかりけるか。又宣旨も両方を尋ね極めて分明の証文をかきのせていましめあるべかりけるか。已今当の經文は仏すらやぶりがたし。何に況んや論師・人師・国王の威徳をもってやぶるべしや。已今当の經文をば梵王・帝釈・日月・四天等聴聞して各々の宮殿にかきとゞめてをはするなり。まことに已今当の經文を知らぬ人の有る時は、先の人々の邪義はひろまりて失なきやうにてはありとも、此の經文をつよく立てゝ退轉せざるこわ物出来しなば大事出来すべし。いやしみて或はのり、或は打ち、或はながし、或は命をたゞんほどに、梵王・帝釈・日月・四天をこりあひて此の行者のかたうどをせんほどに、存の外に天のせめ来たつて民もほろび国もやぶれんか。法華經の行者はいやしけれども守護する天こわし。例せば修羅が日月をのめば頭七分にわる、犬が師子をほゆればはらわたくさる。今予みるに日本国かくのごとし。又此を供養せん人々は法華經供養の功德あるべし。伝教大師釈して云はく「讚めん者は福を安明に積み謗ぜん者は罪を無間に開かん」等云云。ひへのはんを辟支仏に供養せし人は普明如来となる。つちのもちみを仏に供養せしかば閻浮提の王となれり。設ひこうをいたせども、まことならぬ事を供養すれば、大悪とはなれども善とならず。設ひ心をろかにすこしきの物なれども、まことの人に供養すればこう大なり。何に況んや心ざしありてまことの法を供養せん人々をや。其の上当世は世みだれて民の力よわし。いとまなき時なれども心ざしのゆくところ、山中の法華經へまうそうがたかなををくらせ給ふ。福田によきたねを下させ給ふか。なみだもとゞまらず。